TA ができて本当によかった！

11M2029　松尾　悠

私は、哲学倫理学専修の「学びの扉」の TA を担当しています。この授業は、はじめて哲学や倫理学に触れる１年生に、その概要をつかんでもらい、少しでも関心を持ってもらえることを目的としています。ここでは授業形態を踏まえつつ、その授業における TA 活動内容と TA 活動における工夫について著していきます。

１．授業形態と TA 活動内容

「学びの扉」の授業の形態は、哲学倫理学専修の全教員５名によるリレー講義です。５名の教員が２回ずつ講義をするのですが、一回目は「古典と私」と題して初めて触れた古典文献について、二回目は「現代と私」と題して、哲学が現代的な諸問題に対してどういった接し方をしているのか、ということについて話します。一回目の授業では、今では教授である先生が、大学生のときには哲学書を読んでもまったくわからなかったというような赤裸々なエピソードも飛び出します。二回目の授業では、生命倫理やヴァーチャルリアリティの問題などを取り扱うのですが、学生は哲学を踏まえつつ自分自身の体験と照らし合わせて、思考を巡らせます。

毎授業の最後には、学生が質問票に疑問に思ったことや、授業の感想を書きます。次の授業で、先生方がコメントを加えて返却することで、教員と学生の１対１のやり取りを取り入れています。また、授業中にも学生から質問を受け付ける時間を設けています。そうすることで、クラス全体で問題を共有し、その場において全員で考えるということができるという良さがあるからです。春学期は受講者が多く、なかなか手が挙がらないこともあったのですが、秋学期は受講者数が 30 名程度なので、教室に円卓を組み、みんなで顔を向き合わせて会話しやすい環境にすることで、有意義なディスカッションが成立しました。

リレー講義以外にも、哲学倫理学専修出身の先輩が登壇し、「学生当時の哲学との付き合い方」や、「哲学を学んでよかったこと」などを話す授業回もあります。このとき私は、「なぜ哲学をするようになったのかという経緯や、哲学をすることで得られたこと、また大学院に進学してまでも哲学を続けている理由」について話しました。自分が好きで取り組んでいる哲学のよさを少しでも伝えたいと思いながら話しましたが、結果的には自分自身の活動を反省するきっかけにもなりました。一見すると、社会にとって役に立たないと思われがちな哲学に、どうしてそこまで熱中しているのか不思議に思っている１年生からすると刺激的だったようです。

また、秋学期の第一回目の授業では、受講者各々がみんなで話し合ってみたいテーマを挙げてグループに分かれて討論しました。「正義と悪」、「同性愛」、「人間とはなにか」、などのテーマに取り組みました。その際、私は円滑に討論が進むためのお手伝いをしました。

たとえば、あるグループがテーマに対してどういったアプローチをしたらよいのか戸惑っているようだったので、まずは小さな問いを立ててみるように、そして問いの連続がなにかしらの体系になっていることに気づいてもらえるように声掛けをして周りました。学生は、私の些細なヒントも踏まえつつ考察を深めて、本当に素晴らしい見解を提示しました。私は、そうした学生の力に驚き、TA として貢献できたことに感動しました。

受講前後にアンケートを実施したところ、当初はたいていの学生が哲学や倫理学に対して、「難しそうだ」とか「役に立たなさそう」というイメージを持っているようでした。しかし、受講後には「身近な問題を扱っていて、親しみを抱くようになった」だとか「思っていたようにやっぱり難しいけれどおもしろい」という意見が出ました。授業の目的は達成しているようです。

２．TA 活動における工夫

TA は１年生からすると、同じ学生のようでもあり、先生のようでもある存在です。私はいつも受講生と先生の架け橋になるよう心がけています。そうなるために、授業前には積極的に受講生に話しかけてコミュニケーションをとるようにしたり、受講生の名前を覚えたりするようにしています。さらに、授業後には、先生とその日の授業はどんな感じだっただとか、次回はこうしていこうというような反省をします。TA は教員と学生の仲介役であるからこそ自発的な姿勢が求められるものだと思います。つまり、受講生と先生双方のニーズをただ受容するだけでなく、そこからさらに授業という生きた場においてどのような役を引き受ければよいのかを自ら判断して、臨機応変に対応していかなければならないのです。そうすることで、受講生と先生が互いに呼応しあえるような授業ができると考えています。

私自身 TA を経験させていただけたことによって、普段は受け手である授業における先生の授業の組み立方やその意図を垣間見ることもできました。また、受講生の質問表やディスカッションから、同じ授業を受けていてもこんな印象を持つのか、こんな意見も出るのかということを知って学生としてとても感化されました。このように TA をつうじてたくさん成長させていただけたと実感しています。このことをまたこれからの TA 活動に生かしていきたいです。